



『会話の0.2秒を言語学する』

水野 太貴 著

新潮社

2025/08 240p 1,760 円（税込）

第一章 コミュニケーション上手になるための「語用論」

第二章 ことばには“奥行き”がある

第三章 あなたは「ネコ」の意味さえ説明できない

第四章 言語化の隠れた立役者たち

終章 世界は広い！ 驚きのコミュニケーション

【イントロダクション】

「言語化」や「うまく伝えること」といったコミュニケーションの問題に悩むビジネスパーソンは少なくない。だが一方で、我々は誰しも普段の会話で驚くべき芸当をこなしている。相手の話を聴き、それを解釈して自分の言いたいことをまとめて発話する、というプロセスを、平均わずか 0.2 秒の間に行っているのだ。本書では、会話における発話と発話の間の 0.2 秒のプロセスに着目し、語用論、統語論、形式意味論、認知意味論といった言語学の理論を散りばめながら、コミュニケーションのメカニズムを、わかりやすい例を豊富に挙げ解説する。0.2 秒のプロセスの第一歩は、相手の話の「解釈」だが、我々は相手の意図を正しく復元するのではなく、「推論」を行っているのだという。著者は出版社で編集者として勤務するかたわら、YouTube、Podcast チャンネル「ゆる言語学ラジオ」で話し手を務める。同チャンネルの YouTube 登録者数は 55.1 万人超。

●話者の交替にかかる平均 0.2 秒の間にすさまじい高速処理が行われる

会話では、一人の話者が話し、それが終わると別の人が話し始める。話者が交替するまでの発話を「ターン」といい、話者の交替を「ターンテイキング」というが、イギリスの言語学者であるスティーヴン・C・レヴィンソンらの研究によると、ターンテイキングには平均して 200 ミリ秒——つまり 0.2 秒しかかからないという。

応答するためには、相手が言っていることがわからなければならない。その上で、何を言うかもまとめておく必要がある。すさまじい高速処理だと驚く。

「ヒトがわずか 200 ミリ秒でターンテイキングを行なうには、言語にまつわるどのような知識が頭の中に必要で、具体的にはどんな処理が必要か？」。これを「200 ミリ秒の謎」と呼びたい。

●発話のことば自体ではなく、それによる「働きかけ」に注目

「200 ミリ秒の謎」を追う上でまず浮かぶ疑問は、「ヒトは文をどう解釈しているか？」である。全容を解明しようと挑んだ研究者にこれから登場してもらう。勇敢な挑戦を続けるその分野の名は「語用論」だ。

まず最初にご登場願うのはイギリスの哲学者ジョン・オースティン（1911～1960）だ。「発話って、事実を伝えるというよりは、それを通して聞き手や世界へ働きかけているケースがほとんどなんだよ」。オースティンの主張を端的にまとめると、こういうことになる。

あなたの日常を彩っているのはこういう会話が多いはずだ。

- (1) 「明日は3時集合ね」
- (2) 「ごめん、宿題手伝ってもらえることできる？」
- (3) 「この部屋、ちょっと寒いな」

例えば(1)であれば、「約束」という働きかけをしている。(2)は形式的には「宿題を手伝うことが可能か」という事実を確認しているわけだが、実際には「依頼」をしていると見た方がよさそうだ。(3)も同様で、確かに「この部屋がちょっと寒い」という事実は伝わっているだろうが、たいていの場合、暖房の温度を上げるなどの「提案」「要求」をしているだろう。

オースティンのアプローチは「言語行為論」と呼ばれ、20世紀半ばに大きなムーブメントを巻き起こした。そのすごさを僕のこぼれで語るなら、「発話されたことば自体に注目するのではなく、それを通して実現された働きかけの方に注目した」ということになるだろう。

言語行為論がきわめて画期的だったことは間違いないが、疑問は残る。ある発話に対して、人はなぜ、そしてどうやってその働きかけの解釈を特定できるのかということだ。「この部屋、ちょっと寒いな」は提案だ、と言われても、なぜそうなるのかの説明は済んでない。ここに光を当てたのが、イギリス出身の哲学者、言語学者のポール・グライス(1913～1988)である。

グライスが鋭かったのは、人が会話する上で自然と従っているルールを提案したことだ。これを「協調の原理」という。「会話の段階で、あなたが行なっているやりとりの共通の目的・方向という点から、要請されるだけの貢献をせよ」。持って回った言い方だが、要するに「会話はお互いが協力して行なう」と述べているにすぎない。そしてグライスは、協調の原理は4つの公理からなるとした。

- 1. **量の公理**…必要とされるだけの十分な情報を与えよ。また、必要以上の情報を与えるな。
- 2. **質の公理**…間違っていると思うことや、十分な証拠がないことを言うな。
- 3. **関連性の公理**…相手の発話と関連性のあることを言え。
- 4. **様態の公理**…不明瞭な表現や曖昧な表現、冗長な表現を避け、順序だった言いかたをせよ。

しかし、人は思いのほか、この公理を破って発話しているのだ。例えば、こんな会話。(4) A「コーヒー飲む？」 B「明日ね、出張で朝が早いんだ」

Aはイエス・ノー疑問文を発しているが、Bはそれに答えず、質問とは無関係なことを答えている。つまり、関連性の公理に違反しているわけだ。これは何を意味するのだろうか？

グライスが行なったのは、「4つの公理は破られることがあるが、あえて違反することで話者は何かを伝えようとしている」という説明だ。

(4)の会話でBの意図は明確だ。コーヒーにはカフェインが含まれており、飲むと目が冴えて眠れなくなる。ところが翌日が早いので、早く寝なければならない。よって、コーヒーは遠慮したい。では、なぜはっきりと「いいえ」とか「いらない」と言わないのだろうか。それは、あまりにはっきり断ると角が立つため、相手に配慮をしたからだと考えられる。

なぜ僕たちがこういった推論をできるのかというと、Bが「相手の発話と関連性のあることを言え」という関連性の公理に違反したからだ。普段であれば守っているルールを破っているのだから、そこまですほどの動機がBにはあるはずだ。

従来、Bの意図がわかる理由は「文脈から読み取る」くらいのレベルでしか説明されてこなかった。ところがグライスの4つの公理が提案されることで、もっと精緻な議論ができるようになったといえる。

だが、グライスの公理には大きな問題がある。それは、ある発話の解釈をどうやって導き出せばいいのかわからないという点だ。

「その髪型、似合ってるね」という発話の意味自体はシンプルだ。でも、その意図はもしかしたら皮肉かもしれない。「もう前の髪型には戻さずに、このままにし続けたほうがいいよ」という提案の可能性もある。

僕たちの手元にある 4 つの公理だけでは、この違いは導き出せない。導き出した解釈に対して、事後的に「それは〇〇の公理に反していたからだ」と自分に言い聞かせられるにすぎないのだ。

●情報の有益さと「コスパ」を重視して相手の発話の解釈を決める

理論が行き詰まりを迎えると、新たな理論が現れると相場が決まっている。ダン・スperlベル (1942 ～) とディアドリ・ウィルソン (1941 ～) による「関連性理論」の登場だ。

関連性理論は「人間の認知は、関連性が最大になるようにできている」という前提に立っている。例えば、僕たちの周囲にはいろいろな雑音がある。人間はこうした生活騒音をあまり気にしない。一方で、電話が鳴ったらどうだろうか？ おのずと注意が向くはずだ。こうした現象から言えるのは、人間は自分に大きく関係する情報に神経が集中するということ。

なんとなく雰囲気は伝わったと思うが、関連性って具体的に何を指すのだろう？ 平たく言えば「情報の有益さ」である。

そして関連性にはもう一つファクターがある。それが、「処理労力の小ささ」だ。発話を処理する際には少なからず手間がかかり、例えば回りくどい言い方をされるより直接的に言ってもらった方が、労力が低いことは直感的にもわかるだろう。

関連性理論では「情報の有益さが大きければ大きいほど関連性が高くなる」に加えて、「処理労力が小さければ小さいほど関連性が高くなる」と考える。つまり、発話の解釈はコスパを重視して行なう、と言っているのだ。

関連性理論では、ヒトの認知は関連性を最大化するようになっているという前提に立つ。そして発話もその一環として、少ない労力で、コストに見合う解釈を求めて推論し、割に合う結論が出た段階で解釈をストップする。

以前のコミュニケーション観は、こうだ。話し手は何かしらの考えを言語という型に翻訳し、発話する。一方、聞き手はそれを聞き、解読規則を用いて相手の思考を復元する。これを便宜的に「暗号解読モデル」と呼ぼう。

ところが関連性理論はそうは考えない。この理論は「発話を復元する」というアプローチではないのだ。重視したのは文が指す内容から有益な情報を導き出すための「推論」である。これを「推論モデル」と呼ぶ。

推論モデルの前提に立つなら、コミュニケーションが上手な人とは、相手が正確な解釈を迷いなく導けるような、上手なヒントを与えられる人ということだ。僕は自分が誤解を招いたときは、「相手が自身の発話を正しく解読できなかった」と思うのではなく、「相手が適切な解釈にたどり着くためのいいヒントを与えられなかった」と考えるようにしている。

コメント：ダイジェストで取り上げた、語用論による分析のほかに本書で興味深かったのが、フィラーやジェスチャーの役割だ。フィラーとは、「あのー」「えーと」といった、発話の間に差し込まれるつなぎのことばを指す。意味がなさそうなことばだが、実は無意識のうちに、発話の解釈へのヒントの一部になっているという。何気ない、短い発話であっても、そこには多様な情報が含まれているということなのだろう。それを瞬時に処理できる人間の認知の精緻なメカニズムに改めて感心させられる。